

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 24 日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究（B）（海外）

研究期間：2009～2011

課題番号：21401044

研究課題名（和文） 民俗信仰と創唱宗教の習合に関する比較民俗学的研究—仏英の五月祭の調査を中心に—

研究課題名（英文） Comparative Ethnological Study of the Syncretization of Folk Customs and Human-Initiated Religions Based on a Survey of May Day Festivals in France and the United Kingdom

研究代表者

関沢 まゆみ（SEKIZAWA MAYUMI）

国立歴史民俗博物館・研究部・教授

研究者番号：00311134

研究成果の概要（和文）：フランスでは A. V. ジェネップの『フランス民俗学』（1949）に記述のある「五月の木」や「五月の女王」等の伝統行事の現在の伝承実態を追跡する調査を継続し、伝承が途絶えた例と維持されている例とが確認された。伝承維持の事例がプロヴァンス地方をはじめ計 4 カ所で確認され、その存否の背景に一定のリーダー的人物の関与が考察された。また伝承維持の力学の中に民俗信仰と聖人信仰との習合が認められた。一方、イギリス南西部においては現在も盛んに五月の木馬祭が行われており、観光化の促進という聖俗混濁の動態が英仏間で対比的にとらえられた。

研究成果の概要（英文）：

In this follow-up survey of traditional customs in May Day Festivals, such as the maypole and the selection of a May Queen which are described in *Le folklore français* (1949) by A. V. Gennep, it was found that some places no longer practice these customs while other areas continue to. A total of four places in France, including Provence, continue to hold the events and it was observed that the involvement of a certain charismatic individual was central to event survival. The syncretization of folk customs and saint veneration was also noted in the dynamics of event continuation. In Southwest England, May festivities such as hobbyhorse festivals are still held today. Its mixture of sacred and secular elements, including the development of the event as a tourist attraction, was seen as a contrast between the UK and France.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2010 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2011 年度	3,100,000	930,000	4,030,000
総計	9,100,000	2,730,000	11,830,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：民俗信仰・五月の木・カトリック信仰・民俗分布・A. V. ジェネップ・フランス・イギリス

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの申請者の科研費助成による調査研究で明らかになったフランスブルターニュ地方の民俗に関する知見（新谷尚紀・関

沢まゆみ『ブルターニュのパルドン祭り—日本民俗学のフランス調査』悠書館（2008 年）から、同様の民俗がプロヴァンスなど遠隔の地域にも見出され、文献によりかつて広くフ

ランス各地にみられたものであることがわかってきた。そして、イングランドの民俗行事との関連性も注目されてきている。柳田國男が、地域差の中に時代差を読み取る生活文化の変遷史、広義の歴史学として創立した民俗学の視点と方法による調査と分析を進めるとともにフランスやイングランドの研究者との研究交流を通して民俗学の国際化の推進をはかるものとする。

## 2. 研究の目的

(1) 春の行事としてヨーロッパ各地で行なわれていた「五月の木」の行事がなぜフランスではブルターニュのロクロナン、プロヴァンスのキュキュロンなど限られた町にだけ今も伝承されているのか、オートザルプ地方のペイルールで行なわれている五月の行事との関係はどうか、一方、イングランド南西部のコーンウォール州などでは類似のメイポール行事がなぜ今も盛んに伝えられているのか、それらの問題に対する社会的歴史的背景の解明を試みる。

(2) これまでの調査で明らかになった代表的な聖人、聖女アンヌと聖人エロワへの信仰の展開が民俗行事の上で顕著に見出せるプロヴァンス地方に注目し、ブルターニュ地方との比較研究を行ない、それぞれの民俗信仰の地域性と特徴を明らかにする。

(3) 印象論としてよく語られる、敬虔な信仰の色彩の強いブルターニュ地方と祝祭的な色彩の強いプロヴァンス地方、という両者であるが、聖人信仰や伝統行事における共通点と相違点について、具体的な事例分析により、その歴史民俗的背景を解明する。

(4) この第一から第三の課題にあわせて、キリスト教的聖人信仰が伝統的な民俗行事の中に位置づけられ伝承されていくその両者の伝承の中での力学関係について解明する。

## 3. 研究の方法

A. V. ジェネップ(1873-1957)による資料集『フランス民俗学』(1948)の「五月の伝統行事」に関する情報を整理して調査地の選定を行ない、ブルターニュ地方プロヴァンス地方、オートザルプ地方、アルザス地方などにおける現在の伝承実態の調査を継続する。それに加えて、類似の伝統行事を伝えているイングランド南西部のコーンウォール州などを対象地域とする。研究代表者をはじめそれぞれ調査地を選定して研究分担し、対象とする伝統行事の現地調査を事前から事後にわたって継続的に調査し、その成果を持ち寄る。それに併行して関連文献の収集と翻訳を行ない、現地調査で得られた知見とともに資料集としてとりまとめる。

## 4. 研究成果

### (1) 五月祭の伝承—A. V. ジェネップ『フランス民俗学』と現状との比較—

A. V. ジェネップ『フランス民俗学』は、5

月の祭りについて、1930年代までの各地方の調査情報を集成したものである。

5月の主な祭りには、5月3日の聖十字架発見の祭、昇天祭の前の3日間を含む豊熟祈願日の儀式、昇天祭、聖霊降臨の大祝日の4つがある。(後者の2つは復活祭の日から計算されるので年によって祭日が変わる)。ジェネップは、これら「5月3日の聖十字架発見の祭、豊熟祈願日の儀式、昇天祭、聖霊降臨の大祝日はいずれもキリスト教の祭日ではあるが、キリスト教の服の下に、それらの祭りは今日まで否定しようのない農業あるいは植物の性格を保ってきた」。また、「5月は聖母マリアの月であるが、聖母マリアへの崇拝と植物の再生、あるいは耕作が順調に行なわれることとの間の結びつきはみられない。また豊熟祈願日・ロガシオンのプロセシオンにおいてもとくにマリア的な祈りや連携はみられない。昇天祭や聖霊降臨の大祝日のセレモニーに、聖母マリアへの信仰の浸透もみられない。つまり、5月の聖母マリアへの信仰は、ほぼ典礼的にとどまり、18~19世紀の間も、フランスの民俗へ大きな影響は与えなかった」と述べ、5月は民俗信仰を色濃く伝えていると指摘している。

このような民俗信仰を保存しているとされる5月の行事について、戦後の経済変化、生活変化を経た現在、どのような伝承実態がみられるか。地域的には限られた範囲ではあるが、1930年代初頭のジェネップのデータの追跡調査を行ない、現状との比較を行なうことによって、伝承の「維持」「消滅」、そしてジェネップの記述にはなかったが伝承が確認された例も発見することができた。それぞれの要点を以下に述べる。

### (2) 五月の擬人化

ジェネップの資料集成には「5月」の擬人化の形態として、12歳くらいまでの少女のうち年長者が「5月の女王」となって年下の少女を連れて家々を回り、卵やラードをおねだりして歩くもののほか、少年の一人が緑の葉を身にまったり、顔を煤で黒く汚したりして仮装し、やはり集団で村の家々を回って、卵やラードをおねだりするもの、などが報告されている。

これらの伝承の実態について、2009年~2011年の調査ではジェネップの情報集成において1930年代にまだ行事が観察されたと記されている、オートザルプ地方のクレヴウ、モリーヌ・オン・ケラ、オートサヴォワ地方のベルネックス、サヴォワ地方のロッシュフォール、アルザス地方のクリーブルグ、エッシュバツハ、ランゲン、ロスフェルドなどについて調査を行なった。その結果、ベルネックス、ロッシュフォール、クリーブルグでは、「聞いたことがない」「知らない」という答えであったが、クレヴウとランゲンでは子供

の頃、体験したという人物により、クレヴウでは1947年に中止となり、ランゲンでは1950～52年に中止となったことが明らかになった。また、アルザス地方の場合、ジェネップの資料情報でも1930年代にまだ行事が観察された町が比較的多かったが、実際、エッシュバッハとロスフェルドの調査では戦中も途絶えることなく現在まで行事が維持されてきていることがわかった。

#### ① 子供たちの5月の行事が維持されている例

〈事例1〉エッシュバッハ(Eschbach)は人口931人(2011年)の町である。パントコット(復活祭後7度目の日曜日)にフィンチドトラックの祭りが行なわれる。1931年生まれの男性は12歳の時、この祭りに参加している。12歳の男の子が楡の木で作った鞭をうちながら町の中を回り、翌日の月曜日には家々に卵やラードをもらいに行った。今は参加者全員が顔に煤をつけて黒くするが、以前は一番年長の人、1人だけが顔を黒くした。帽子もこの人だけがかぶり、彼は「フィンチドトラック」と呼ばれた。もらった卵とラードはパン屋などに売ってお金にするか、ラードと卵をまぜてオムレツにして食べた。

〈事例2〉ロスフェルド(Rossfeld)は人口800～900人(2011年)の町である。パントコットに12歳の男の子の内1人が仮面をつけて仮装し、皆で家々を回って物貰いをする行事が行なわれていた。今は5月1日に12歳の女の子たちの「春の使者」の行事だけが行なわれている。朝9時から少女たちが、木製のカートに白樺の枝をつけてリボンと風船を飾って、1軒1軒村を廻る。全ての家の前でアルザス語で春の訪れを告げる歌をうたい、春を告げたお礼に卵かお金をもらう。春を告げているのは、自分の人生の春も告げている年齢の女の子たちだという。

1947年生まれの男性は、「5月の行事は、一回やめたらもう終る。今、若者は中学で隣の町に行くので、ロスフェルドの行事に興味がない。外から転入してくる人もいて彼らは行事に興味がない。こんなふうだから、年寄りだけが行事に興味があるが、孫に教えられないでいる」と言い、5月の行事を続けることが難しくなっている現状を危惧している。

**継続の理由** 〈事例1〉のエッシュバッハと〈事例2〉のロスフェルドでは、ともに強力にこの行事を維持しようとする個人がいることが共通していた。転入者の増加により村の伝統行事への関心や理解が急速に得られなくなっている現状のなかで、彼(彼女)らが村のアイデンティティをこの行事に見出していたことが注目された。

#### ② 子供たちの行事が戦後、消滅した例

〈事例3〉クレヴウ(Crévoux)は山間部に位置する人口約200人の集落である。5月の第一

日曜日に、8歳から12歳の女の子のうち年上の人リーダーになり、歌を歌いながら、家々を回って、卵、牛乳、砂糖、チョコなど、ケーキやクリームを作る材料をもらって歩き、ブニュと呼ばれる揚げ菓子を作った。1935年生まれの女性によれば、彼女が12歳の時、1947年に参加したのを最後に、女の子の数が少なくなったのでこの行事をやらなくなった。

そして彼女によれば「クレヴウでは5月の第一日曜は、1939年以前はまだ、若い娘たちの祭りだった。彼女たちの一人が、女王として娘たちを率いて、家々に卵を集めに行き、それでオムレツとブニュを作った」というジェネップの記述の通りであったという。

〈事例4〉ランゲン(Rangen)は、人口161人の町である。パントコットの午後、10～14歳の男の子がお父さんの上着と帽子をかぶって仮装をして、村の家々に卵とワインをもらいに歩く。縦1m×横2m×高さ1mの小型のシャレットに男の子が1人乗り、大きな犬2匹に引かせる。それに卵を入れて運ぶ。犬が運ぶので子供も喜んでいて。村を全部廻ると、友達の家(農家の納屋)に集まって卵料理やお菓子を作ってもらって食べた。男の子だけで、女の子は参加しなかった。

1939年生まれの男性によれば、当時、男は10歳から農業の仕事をしなないといけなかったもので、両親がこのような遊ぶ日をご褒美として作ったのではないかという。この行事は1950～52年になくなった。彼は10歳(1949年)から、1、2回、参加して、最後の体験をした世代である。

**消滅の理由** 戦後、5月の子供たちの物もらいの行事が消滅した〈事例3〉のクレヴウと〈事例4〉のランゲンでは、生活の変化が背景にあることがわかる。いずれも体験者の話により、クレヴウでは12歳以下の子供たちの数が少なくなってしまった、ランゲンでは12歳までであった学校生活が16歳まで教育を受けることになったため12歳の子供たちが行事に関心がなくなることがわかる。とくに、ランゲンでの話では、12歳という年齢が、当時の貧しい農家の子供にとって、仕事を始める前のいわば子供時代最後の年齢であったという生活実感を伴っていたことも注目された。

#### (3) 五月の木

5月の木に、村や町の広場などに立てられる「集団の5月の木」と、若い娘の家の入口に置かれる「個人の5月の木」とがある。ジェネップは「ブルターニュとプロヴァンスの2つの地方からは5月の木を立てる習慣についての報告がない。ここには大変良い観察者がいた。したがって、そこでは習慣が認められなかったと認めなければならない」と述べている。しかし、実際の調査では、ブルター

ニュ地方のロクロナン、プロヴァンス地方のキュキュロンとヴァハージュにおいて、現在も5月の木を立てる習慣が維持されていることが確認された。

#### 「集団的な5月の木」が維持されている例

〈事例1〉ロクロナン(Locronan)は人口約800人の中世的な町並みを残している観光地でもあり、6年ごとのトロメニと呼ばれる伝統行事で知られる町でもある。5月1日に徴兵年齢の男子がブナの木を伐ってきて、教会の前の広場に立てる。6月23日の夏至の日の夜、伐り倒して、細かいチップ状にして、サンジャンの火として焚く。

〈事例2〉キュキュロン(Cucuron)は人口約1500人の町である。5月21日のすぐ後の土曜日に、男たちがポプラの木を伐ってきて、教会の入口に立て、8月15日の聖母マリアの祭の前までに片付ける。

キュキュロンでは5月の木はキリスト教以前からの伝統と伝えられており、次のような伝承がある。1720年10月1日から1721年10月29日までペストで1000人以上が死亡した。当時、村には3000人が住んでいたが、3分の1の人々が死んだ。人々は聖女チュールにペストがなくなるように祈り、村から2kmの地点にあるN.D.エルミタージュへ裸足で灰をかぶって巡礼を行なった。そうするとすぐにペストは終息した。お礼に聖女チュールの日(5月21日)にポプラの木を立てることになった。

〈事例3〉ヴァハージュ(Varages)は人口約1100人の町である。4月30日から5月1日の間の夜に立てる5月の木と6月2日(今は6月の最初の週末)に山上にある聖人ホタンのシャペルに立てる木との2つがある。

〈事例4〉サンテチエンヌ・ドゥ・ティネ(Saint-Etienne-de-Tinée)はコートダジュール地方の山間の谷に位置する人口約1800人の町である。4月30日から5月1日の間の夜に、徴兵年齢の若者によって山から切り出されて準備されたモミの木(20m)が、町役場の前の広場に立てられる。若者たちは樹皮をむいてつるつるにした木に次々と登って木を立てるために用いた縄をとる遊びをする。この木は5月いっぱい立てられている。

#### 「集団の5月の木」が確認できなかった例

ジェネップがオートザルプ地方では集団の5月の木はここでしか指摘されないと述べていたサレランでは、若い娘たちの窓へ花束を捧げることと、集団の5月の木を立てることが報告されていたが、山深い地で過疎化が進行しており、1922年生まれの男性に尋ねても、集団の5月の木のことは聞いたことがないということだった。

サヴォア地方のル・ヴィラルールでは、「ダンスのある集団の5月の木のたった1つの例」と報告されていたが、覚えている人はい

なかった。代わりに1926年生まれで1947年に結婚してル・ヴィラルールにきた女性によれば、5月の祭りではロガシオンが1950年頃まで行なわれていたことを聞くことができた。

ドフィネ地方のブルニェールとサントノーレの2カ所は「ダンスのある集団の5月の木の例」とあったが、いずれも覚えている人はいなかった。

このように5月の木を村に集団で立てる事例も、若者が年頃の娘に花束や木の枝をおくる事例も、少数の事例についてはあったものの、結果としてジェネップの集めた情報についての追跡はもはや不可能であった。

ジェネップの記事にはなかったが、プロヴァンス地方で近年になって廃止された事例も確認することができた。

〈事例5〉モンフォール・シュール・アルジャン(Montfort-sur-Argen)では、1924年生まれ女性によれば、4月30日と5月1日の間の夜に、適齢期の女性のいる家に若者がブーケをおくる習慣と、町の中の噴水を花で飾る習慣との2つがあった。昔は地元の人だけが参加して夜のうちに借りてきた花が翌日には持ち主に返されていたが、10年くらい前から、他の町からも人が来るようになって噴水を飾るためではなく自分の家に飾るために花を盗む人も出てきた。花が盗まれるようになったころから、若い女性にブーケを贈るのもやらなくなった。そして、2000年、若者が物を壊したりしたのを怒った人がいて行事は中止になったという。

#### (4) 豊饒祈願の道行き(ロガシオン)

ジェネップも調査を行ない、1970年代にマリ＝フランス・グースカンが1979年に再調査(『フランスの祭りと暦』樋口淳訳 原書房 1991)を行なっているアルプ・ドゥ・オートプロヴァンス地方の山間部に位置するペイルール(Peyroules)という人口約150人の村落の現状についての調査を行なった。4月29日のサンピエールの日に行なわれている(2005年頃から5月1日の休日に変更)祭りは「ロガシオン」とは呼ばれていないが、内容的には、畑の作物のために良い天気恵まれることを祈りながら、ラ・パティ、ペイルール、ラ・フスというそれぞれ十数キロ離れた3つの集落を順番に歩き35kmの道のをプロセシオン(行進)するもので、村内に8~10カ所ある十字架の前で止まり、畑の土のために神父がベネディクションを行ないながら一周することになっている。

この調査により、第一に、徒歩によるプロセシオンから、車に乗っての移動へ、個人の家での昼食のふるまいから、町役場のホールでの会費制の昼食へ、とプロセシオンへの参加は変化したが、畑の作物の実りのために天候に恵まれることを祈る点は変わっていないことが確認された。第二に、1914年から

45年頃、サンピエールの祭りへの参加者が極端に減り、存続の危機にみまわれた時、ペイルールに4代にわたって住んでいた女性（1932年生まれ）とその夫（1930年生まれ）が、女性の伯母から第一次大戦以前の祭のやり方を聞いて、行事を復活させたという経緯についても確認された。

#### (5) 5月の行事の意味

以上、フランス各地の5月の行事の調査により、5月の行事の意味について、ジェネップが、5月は聖母マリアの月であるが、聖母マリアへの崇拜と、植物の再生あるいは耕作が順調に行なわれることとの間の結びつきはみられないと、その民俗信仰的な性格に注目している通り、5月の行事の主要な点はキリスト教信仰よりも民俗信仰が主であり新しい生命の季節の到来を喜ぶことと豊饒を祈願することに見出すことができる。

そして、もう一つは、ジェネップが明確に指摘していなかった点であるが、実地調査からいえるのは、若者への試練という意味である。5月の行事の担い手に、12歳くらいの子供たちの場合（仮装して物貰いに歩く）と、18歳くらいの青年の場合（5月の木を立てる）とに分けられるが、後者については徴兵年齢になったことと、高さ20mにも成長した重い木を森から切り出して村まで力を合わせて運び、工夫して広場にそれを立てるという一連の作業を行なうことは試練というにふさわしい重労働である。それは2010年5月にキュキュロンの5月の木を立てる行事の実地調査によって強く実感したところでもある。

#### (6) 伝承の力学—残ることの意味—

1930年代初頭のジェネップの資料集成から、約80年を経た現在における追跡調査のなかで、すでに伝承が消滅し、忘却されている例が非常に多かった一方、伝承が維持継承されている例も確認された。その維持されているケースの特徴は、その町や村においては、5月の行事が彼らの郷土アイデンティティを形成していること、また、伝統行事が村のアイデンティティとして有効であるということに自覚している人物（リーダー）がいること、であった。町と人が伝統行事を守り伝え、伝統行事が町と人を守り伝える、という相関関係である。

リーダー的な彼（彼女）らがコアとなって、伝統行事の維持のためにその行事の歴史を調べて村の歴史の本の刊行や広報誌を利用して情報発信したり（エッシュバツハ、ロスフェルド、キュキュロンなど）、祭りに先立ち、勉強会を開いてレクチャーしたり（キュキュロン）、伝統行事の復活を試みたり（ヴァハージュ）して人々が参加するための雰囲気作り、環境整備を積極的に行なっているのが共通していた。

こうして、現在に伝統行事が残ることの背

景には、転入者の増加がおこるとともに、伝統行事を残すことによって町のアイデンティティとしての位置付けを明確にしていこうとする傾向性が見出された。

#### (7) イギリスのメイポールと五月の木馬祭

現在も盛んに五月の祭りが行なわれているイギリス南西部、コーンウォール州、パッドストーンにおける木馬祭（5月1日）、ランリースのメイポール、ヘルストンにおけるフェーリー踊り（5月8日）、サマーセット州、マインヘッドにおける木馬祭（5月1～3日）デヴォン州、クーム・マルティンにおけるローン伯爵狩（1837年に禁止されたのち、1970年に復活）、など5カ所の五月祭の実地調査を行なった。なかでも古くからの伝統を有するパッドストーンの祭りは、4月30日の夜「朝の歌」を歌いながら町を回り、翌朝7時から、胴体約2mの作り物の黒い馬2匹が別々に町を歩く。この馬に触られた女性は「ラッキー」（妊娠する）といわれている。馬の後に続く音楽隊が生き生きとした「朝の歌」から悲しい「昼の歌」に切り替えると、馬は「死ぬ」。1分後、再び「朝の歌」に戻ると馬は生き返る。これについてはキリストの復活と関連づけて、冬後に訪れた春の、再生を象徴する儀礼と解釈されている。祭りは約11時間続き、約20分ごとに馬の中に入って操る人物が交代する（合計約50人が行なう）。夕方、2匹が広場で落ちあい、そこに立てられている約10mのメイポールの回りで踊る。木馬2匹はそれぞれ赤と青の飾りが付いていて、町が「赤馬派」と「青馬派」に分かれている。パッドストーンの赤馬派は「古い本物の馬」と呼ばれ封建主義的な人々が支持し、一方、青馬派は民主主義的な人々が支持しており、両者には世俗的な対立が続いている。また、教会の牧師の多くは木馬祭を「ペーガン」（異教徒）の出来事とみなしてきたこともあって、2匹とも教会に入ることはなかったが、2007年に進歩的な考え方の牧師が着任し、翌2008年以降は青馬だけは教会に足を踏み入れるようになった。

このイギリス南西部の五月の木馬祭の調査からは、町の人々の赤・保守と青・進歩という世俗の対立の顕在化、また観光化の促進という側面が注目される。

#### (8) 英仏の五月祭の伝承の比較

本研究期間において、五月の木をはじめジェネップの資料集成に記載があったフランスの五月の行事のうち、現在も伝承が確認されたのは、観光化とはかけ離れた山間の奥まった村などであった。イギリスの例では、伝統行事が観光資源とされて維持・継承されているのと対称的に、フランスのそれらの例では、伝統行事が村や町のアイデンティティの維持・更新に有効であることが自覚されて維持・継承されている。そうしてフランス各地

で収集された伝統行事の消滅と維持に作用する様々な要因とその相互関係が注目される一方、イギリスでは世俗化と観光化が促進されて聖俗混淆の中に強力な伝承力を得ながら伝承されているという動態が対比的にとらえられた。

#### (9)内外に与えるインパクト

柳田國男が強調したように日本の民俗学は比較研究法を基本として生活文化を変遷論の視点からと伝承論の視点からと、この二つの視点から分析する学問であるということにつねに自覚的である必要がある。本研究では具体的な事例情報を1930年代と2000年代初頭という約80年の時間差の中にそれぞれ伝承の過程と現状とを追跡し分析することで民俗学の視点と方法の有効性の一端を例示できたといえるのではないか。また、現在の日本の民俗学にとって国際的な研究交流は当然必要な研究活動であり、柳田の構想を発展させる意味でもその民俗学の視点と方法をもってフランスやイギリスの各地の民俗調査を実践し一定の分析結果を示していくというのは、日本の民俗学の活性化と国際化にとって重要な活動といえる。

民俗信仰と創唱宗教の習合という問題では、日本の国内だけでは宗教の習合といえば神仏習合が議論の中心となりやすいが、仏教や神道と民俗信仰との習合も重要な研究視点である。その視点を英仏ではキリスト教と水・火・石・木など自然をめぐる民俗信仰との習合という視点で追跡できたことによって、信仰要素の混融ではなく混在であることが明らかとなり、この視点は日本の宗教民俗研究にも反映させることができる。また、民俗的な伝統行事の社会資源化（村のアイデンティティ）や経済資源化（観光資源）の動態の検出や、伝統行事と地域社会の活性化をめぐる相関関係への着目も、日本の民俗研究においても参考となるであろう。

本研究の意義の一つは、比較研究と研究交流の実質化の例を、こうして日本の民俗学が示すことにより、国内外および学問内外にこの研究方法とその実践の今後の活性化を促すことができることではないかと考える。

#### (10)今後の課題

先に行なってきたブルターニュ地方のバルドン祭りや聖人信仰との比較の視点から、プロヴァンス地方の五月の祭りを中心に原稿を執筆し、補充調査を行なう。数年以上にわたり継続してきた研究であり、まとまった論著を提示できるよう、調査と研究の方法にさらに改良を重ねながら今後も調査研究を積み重ねていきたいと考えている。

#### 5. 研究組織

##### (1)研究代表者

関沢 まゆみ (SEKIZAWA MAYUMI)  
国立歴史民俗博物館・研究部・教授  
研究者番号：0311134

##### (2)連携研究者

新谷 尚紀 (SHINTANI TAKANORI)  
國學院大學・文学部・教授  
研究者番号：80259986  
トーマス P ギル  
(THOHHAS PARAMOR GILL)  
明治学院大学・国際学部・教授  
研究者番号：50323655